

ここに新田寂仁徳啓應居士こと大塚啓吾殿、昭和十三年九月四日、八王子は当地当処に大塚家の長子として生を受く。

幼くして母亡くすことなどあり。またいささかに事情ありて、祖父栄二郎殿の家にて育まれしものとか。

のち八王子高等学校に学びて、当初家業なる農業・養豚業を手伝いたるもの、生来の機械好きなれば、某自動車修理工場に職を得て技術を学ぶ。

昭和三十五年、故人二十三才、近隣なる某社に事務員として働く友江殿と出逢い結婚、而して家に一男一女を挙ぐ。のち夫人の協力ありて独立、大塚自動車修理工場を興したるものなり。

爾来、盛時には数人の社員雇うことあるといえども、殆どは独力でこれをこなし、夜遅く十一時、十二時まで工場灯りともりたるとか。

故人、酒もタバコもやらず真面目一方、かといって決して堅物にはあらず、誠に心温かき人なり。

事務所のうち常に客の影途絶えることなきは、その人柄慕う人の多ければならん。

趣味となすはライブSLとか、生来の機械好きこうじて、幾たびか自作のSLに子供ら乗せて走らせたることもあるらし。

また消防団に籍をおきて活躍、近隣の火災に窓蹴破りて消火に務めたる父の姿、幼き友和殿の心にあざやかなり。

友和殿、家業の跡を継ぐべきか迷いたる時、父曰く、自らも好みたる道選びしものなれば、友和殿の望みたるを道を行けと、さればと現在は杉並区の天沼中学校の美術教師を、その天職となしたるものなり。

故人五十の峠こえし頃とか、いささかに四大乱すことあり。以来妻友江殿、常に夫君の健康に気を遣いてすごし来たるも、頑健にみえたるその身体に宿痾重くひそみたるらし。四年ほど前、不調を訴え、徐々に手足、我が意のままに動かすこと能わざる事態に及び、一年半ほど前自動車修理工場これを廃すに至る。

病状なかなか改善されず、時として意識危うく、入院すること度々となりぬ。

友江殿これを憂いて一日も永き長生を願い、心くだきて万全の介護をなす。

その甲斐もなく、三週間ほど前、再入院、医師より三ヶ月の命との宣告あり。されど、ある日の昼近きに至り恩愛の家に別れを告げ、六十八才を一期として、北郎の風にゆらりゆらめいて黄泉の客となる。

時にあたりて、故人の来し方に思いいたせば、幼き頃の母の愛なき生い立ちに、我が子だけはかくなる思いさせじと願いたる心優しき父なり。

かくて仕事に励みつつ、ライブSLに極上の楽しみを見出し、同行二人と歩みたる四国八十八カ所も、あと十ヶ寺を残すのみ・・・

つい先日夕べ、ひさかたに大好物のソバを味わい、あすは一時帰宅などと話したるも夢か、容態急変す。一度は持ち直したるかに見ゆれども、終の道は下り坂、いま一度、愛孫一成殿に会いたしの思い背に、旅路急ぎたるらし。

友和殿、別れに際し語りたる、故人をして兄であり、友であり、仲間である父、世界一の父なりと。そは子が父に贈りたる素晴らしき勲章なり。

いくつかの春秋残してのいささか早き別れとはいえ、一家・一門のかくも温かき思いに送られての旅立ちなれば、正に大往生なり。